

# 会 報

## 公認会計士三田会

### 目 次

1. ユニークな三田会……………塾長 石川 忠雄…………… 1
2. 会社経理とのかかわり……………衆議院議員 桜内 義雄…………… 2
3. 研究余滴 — 3つの随想……………商学部教授 會田 義雄…………… 3
4. 「商法の基礎」に因んで……………村山 徳五郎…………… 6
5. <社中交歓>
  - ① 僕の慶早戦……………高橋 正彦…………… 8
  - ② 私ガンバります……………塩垣 るみ子…………… 10
6. 義塾の近況……………塾長室長代理 福留 孝夫…………… 12
7. 公認会計士三田会の有資格者の現況(昭和60年10月末)……………西野 清…………… 14

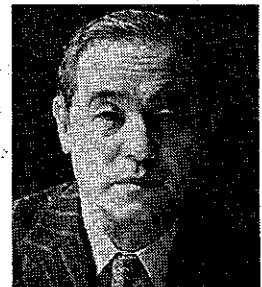
### ユニークな三田会

塾長 石川 忠雄

公認会計士三田会は数多い三田会のなかでもきわめてユニークな存在だと思っている。それは会の活動が活潑だということもあるが、他の三田会の多くは懇親ということが第一の目的となっているのに対して、公認会計士三田会の場合、会員相互の親睦を大切にしていることはいままでもないが、それと同時にこの会の存在が、公認会計士という職掌柄からも、ひとつの研鑽の場としての役割をも果たしていることである。三田会に出席することが、楽しいということと共に、為めになるという側面をももっていることに、私は公認会計士三田会のもつユニークさを指摘したいのであ

る。

生涯教育、ないしは生涯学習ということがしきりに叫ばれている今日、今後の三田会のひとつの在り方を示したもつとして、公認会計士三田会の活躍に、期待を寄せている一人である。しかもいまひとつ注目していることは、この三田会が後輩を育てることに、きわめて積極的に取り組んでおられることである。そしてこのことが、公認会計士の国家試験において、慶應義塾が



過去連続11年間もの長きにわたって、首位の座を守り続けてきたことの、ひとつの隠れた要因ではなかったかと考えている。少なくとも、先輩たちが築いてこられた榮光を、守ってゆきたいとする

気持が、後に続く者たちに大きい励ましとなったことは、争えない事実である。

その意味においても、公認会計士三田会の今後ますますの発展と充実を、心から祈ってやまない。

## 会社経理とのかかわり

衆議院議員 桜内 義雄

公認会計士三田会の皆様、新年お目出度うございます。

三田会と云うと年度別であるとか、企業ごとであるとか、地域別であるとかが普通であるが、貴会の様に業種によって結成されているのは余り数は多くないと思う。しかも会報まで発行していることは珍しいことだ。

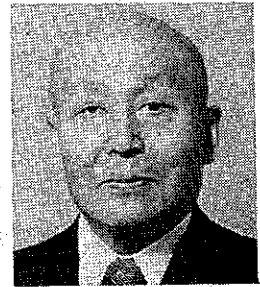
本年の連合三田会の折に、石川塾長は塾の近況にふれられ、野球の優勝等を誇りにせられたが、その中で公認会計士の資格取得が各大学中の首位にあることも云われ心強いことだ。

私も経済学部出身なので、公認会計士になろうと思えばなれたのではないかと思う。昭和10年の卒業期は余り就職が簡単な時ではなかった。父はそのことを心配して今の東芝に就職を頼んでくれた。当時の山口社長はその要請を引き受けたが、会社に入るうちは是非経理に明るいようしっかりやれと云われた。私はその好意に自信がなったが、幸い学校の推薦よろしきを得て鐘紡に入社した。

その後支那事変の応召、除隊を機に、父の秘書をやったりして政界入りをした。その秘書時代に二、三の会社の監査役とか調査役を兼ねたことがあって、

会社経理を多少知る機会を得た。現在新商法では監査役を重視し、更にはコンピュータ時代で、一層詳細に迅速に経理面を掌握し、見通しを持つことが極めて肝要になった。そのような時代の公認会計士の役割は、企業のために重要な存在であると思う。

会計士の皆様が三田会を通じて、横の連絡を取られ御活躍をいただいていることは意義深いことと存じます。貴会の御発展、会員諸氏の御健勝を祈ってやみません。



## 研究余滴 — 三つの随想

商学部教授 會 田 義 雄

研究余滴とはいうものの、アカデミズムのものを意図しているわけではない。編集者の御希望により最近のつれづれに想うことを、いわば研究生生活における“残りのしずく”を以下、三つに分けて記してみたいと想う。

その一 会計士は豊かに誕生すれど、会計学者の人数の余りにも乏しきこと。

このことは、慶應義塾の卒業生で公認会計士試験に合格する者が、ここ11年間もトップの座を占めているのに、実は義塾の商学部、経済学部に在籍している会計学者が余りに寥々たること、それは一体なぜなのか、このままでよいのか、どうしたらよいのか、と考えめぐねている想念をこめてある題材のことをいう。

近年、とくに昭和60年の慶應義塾大学は文武両道に著しくすぐれている証左をいくつか指摘されている。武道では57年ぶりに全勝優勝した野球部と42年ぶりに優勝したハンドボール部がとりあげられ、文の道では司法試験で第4位(41名合格)などのほか、きわ立っての事実として公認会計士の第二次試験合格者が本年まで引きつづき11年間もトップの座を占めているのが注目されている。

しかし反面、商・経両学部の会計学者、とくに財務会計領域でのスタッフで大学院の授業を担当するスタッフの人数の乏しいのが憂えられている。早稲田大学でも類似しており、会計学のスタッフは11人いるが最年少は39才の教授であり、その下に助教授、助手はいないともいわれる。義塾では昨年、山榊先生が定年前に他界され、定年前退職の和田木先生も本年他界され、あと3月後にはM教授も定年退職される。早・慶両校のスタッフは

政府関係の委員や学会などの役員になることも多く、人数の不足は残留者へのしわよせとなる。

過日も学生新聞から、なぜ、慶應関係者が難関といわれる公認会計士試験に強いのかと取材のための質問をうけた。それは、①学生の質が高いこと、②商・経両学部が入試科目で数学を必須としていること、③自由な学風が自由職業人へのあこがれとも予想される諸点を指摘しておいたが、他方、その反動からか、会計学者が豊富とはいいいかねる悩みをもっている実情を訴えた次第である。

福澤諭吉の数多くの著作などをたどってみても、公認会計士を輩出させる基盤が義塾にはあるようである。たびたび引用される「独立自尊」も人に厄介にならず、人にも厄介をかけないこととされると、これも自由職業に通じるところがあるし、「実学」についての「日常の役に立つ実学を学び……身を独立し、家を独立し、天下国家も独立す」と説かれるところも同様の響きをもつ。他方、学者については“学者飼い殺し論”で、好き勝手に自由に研究させたい意向がうかがえるも、“やせ我慢の記”の解釈から、学者生活の貧弱が連想させられる感もしないわけではない。

7年前、アメリカの会計士事情を調査して知ったことだが、ビッグエイトの会計士達の幾人かのパートナーは、5年間位会計学者をつとめてから、再び実践につくという。学者・研究者と会計実践家との交流がとても円滑になされている実情をかい間みた。小泉信三元塾長も純血主義よ



りも混血主義を採用した方がすぐれた人材をスタッフとして得られると説かれていた。アメリカによき手本があるとも目される。定年間近にあって、この人事の交流が少しでも芽生えないか、すぐれた会計士の人達に会うたびに痛感しているのが、とくに先輩、同僚の会計学者が義塾を去られた私の研究環境をみわたしての“ひとしづく”の想念である。

その二 英米の会計士達の「経済の担い手、指導者」とのプライドとその盛業なこと。

この随想は、実証研究を意図している、わたくしの各国の監査事情の研究から生じた“ひとしづく”である。

下記の表は、英、米、日本3国の会計士の数とその背景となる会計士の歴史、人口、面積を比較したものであり、国力からしてわが国ではさらに大幅な会計士の増加が期待さるべきとの考えで表示したものである。

	英国	米国	日本
公認会計士の数	約 120,000 人	約 200,000 人	7,700 人
その歴史	大よそ 140 年	大よそ 100 年	35 年
人口数 (1975年)	約 5,600 万人	約 2億 1,000 万人	約 1億 1,000 万人
面積	24 万 km <sup>2</sup>	939 万 km <sup>2</sup>	37 万 km <sup>2</sup>

さて、イギリスのビッグな会計事務所の誕生は 1850 年デロイト氏がロンドンの地に事務所を開設した史実で語られることが多いが、その後 45 年を経て 1895 年 ニューヨークに設立されたハスキンス・セルズ会計事務所と業務提携し、現在のデロイト・ハスキンス・セルズ社というビッグエイトが誕生したという。これらの史実のなかから、産業革命の洗礼を最初にうけたイギリスにおいて勅許会計士や公認会計士がまず誕生し、より一層資本主義経済体制の花をさかせたアメリカでビッグエイト中心の外部監査制度が開花したと展望される。そしてイギリスでは 1948 年会社法による

強制監査制度までは不正と誤謬の発見に重点があったが、1967 年の会社法改正から株式会社は（現在約 80 万社）大・小会社を問わず監査対象会社とされたのに対し、アメリカでは強制的な法定監査は大会社に限られており、外部監査は内部統制の整備を前提として試査による監査を建前としている差異が認められる。

しかしながら、英米の監査事情には、とくにわが国のそれに比し、差異点よりも共通点が著しく多いことが注目される。その要点を列記して、わが国のあり方を考えるよすがとしたい。第一に英米ともに会計士は経済界の指導者としての自覚が強く、職業についてのプライドも高く、医師、弁護士とならぶ 3 大プロフェッショナルであるとの矜持を共通してもっているのが注目される。

第二に、前掲表に示したように、勅許会計士および公認会計士の人数が、わが国の会計士に比し、極めて多いのが注目される。二次、三次という試験ステップもなく、合格率も大よそ 30% 前後と高い。のみならず英米では産業界の入社ルートはビジネス・スクール等を除き、大学から直接産業界に入る道のほか、いったん会計事務所に入って会計実践に習熟してから会社に入るケースがあり、そのために会計事務所の社会的役割も大きいと自覚されている共通点も認められる。

第三に、会計事務所での監査は組織的監査といわれるように審査機構が整備しており、また監査料も高く、売上高の 1% という監査報酬を支払っている会社が平均値であるというような統計も発表されている。会計事務所の業務は監査・会計のほか、税務および MS 業務もあり、事務所収入の平均 30% 前後を占めているが、それゆえにこそ審査機構が重視され、ピアレビュー（同僚監査）もなされている。

第四に、キリスト教社会では、性悪説が広く認められ金銭の動くところ必ず第三者たる外部監査人の監査は至当のことと受入れられており、それ

に対するに儒教のいわば性善説が広く認められ、とくに集団重視、いわゆるグループへの帰属意識の強いわが国では一般に監査はなじみにくいとみなされている。

これらの英米の共通的特性は注目される場所ではある。しかし、英米の会計士だけがその盛業を誇っているはずはなく、社会経済制度の国際的調和化の動向、他人の資金を預かる有限責任会社での外部監査の必要性、経済界における会計士の指導者としての役割の重要性、会計業務の専門性等からして、わが国の公認会計士の質、量ともに飛躍的發展が期待されねばならないと感じているところである。

### その三 公営企業等にみられる資本概念の多義性と不明確なこと

公営企業とか公企業概念論には立入らないことにするが、下記の表に示したものは、最近いささか関与することになったN社の過去35年の資本の部の推移表である。この資本の部から、改めて公営企業の資本概念の多義性、不明確性について頭を悩まし、かつ、資本とは何であろうか苦しんでいる次第である。

#### 昭和25年度末資本の部の表示

剰余金	
再評価積立金	2,084
固定資産充当金	136
繰越欠損金	△ 20
当期剰余金	41
資本合計	2,241

#### 昭和35年度末資本の部の表示 (改正)

資本	7,152
積立金	1,272
当期剰余金	3,922
資本合計	12,346

#### 昭和59年度末資本の部の表示 (改正)

資本	139,643
承継資本	163
固定資産充当資本	139,480
積立金	444
繰越剰余金	444
当期事業収支差金	25,672
資本合計	165,759

このN社では過去30余年、資本の部を再三改正しているが、そこでは元本の資本に加えて、資本的支出に係る造成資本、さらに経営成果としての利益留保も資本に含めている。わが国の現行地方公益企業法施行令では、「自己資本金への組入れ」といい、目的使用した利益積立金を自己資本金へ組入れする資本会計方式をとっていると解されているが、減価償却との関連もあいまいである。

過日、公益法人会計基準も改正されたが、とくに「正味財産の部」において基本金（基本財産と定めた資産の合計額をいう）等は内書することとされた。これらの課題を含め、当分の間、資本概念に悩まされつづけそうである。



## 「商法の基礎」に因んで

昭30経済卒 村山 徳五郎

倉沢康一郎さんから贈られた「商法の基礎」と題する本をいま読み了ろうとしている。いただいたから、あるいは倉沢さんが現在法制審議会商法部会の委員でいらっしゃるから、義理で読んでいるというわけではない。前から、かくの如き書物にゆきあえば是非読んでおきたいという内的欲求があったのである。読んだ限りでも、たいへん勉強になった。

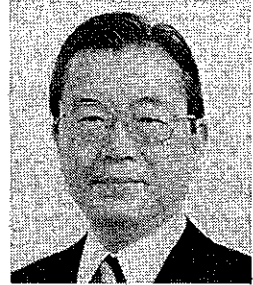
昔、民法の碩学我妻栄先生が「民法案内」をお書きになった。法律に疎い者にはまこと有難い本であった。この本は、はじめ「私法案内」と題されていたが、第二巻目からは「民法案内」と改題され、えんえんと巻を重ね、しかし完結を見ないで中絶したようである。たまたま初巻を手にしたのは、私がまだ会計士補の頃であったと思う。この本は、私にとってまさに“この一冊”に当るものである。いつの日か出来ることなら、自分の専門分野でかくのごときものを書いてみたいと、幼い野望さえ抱かしたほど、当時の私にとっては刺戟的であった。倉沢さんの本を読んでいて、はしなくもそのことを憶い出し、久しぶりに古い書物の埃を払ったのである。

＊

いわゆる大小会社区分立法問題は、いまわれわれにとって重大な関頭を迎えようとしている。外部監査問題が、とりあえずの結着を見ようとしているのである。

想起こそせば、この問題が提起され、公けに議論されるようになってからでも、もう3年の歳月が経過しようとしている。3年もたったのかという思いのうらには、いっこうに議論が進まないことへのもどかしさがある。現在、商法監査問題研

究会と称する場において関係者による協議が行われているが、ぎりぎりの最後の段階まで、過ぎた3年の状況が縮図のかたちで繰り返されるのではないかとさえ私は考えている。



それはともかくとして、立場上、私はこの数年、いろいろなかたちでこの議論に参加してきた。そして折にふれて思うことの一つは、われらのごく当り前の常識としていることがかならずしも顔面どおりに通用してはいないらしいという事実である。例えば、一昨年の方務省「問題点」に対する協会の意見書も、単に法務省案、つまり当時の限定監査制度導入に対する反対論として位置づけられ、われわれの真意は、一般に十分理解されるどころではなかった。あまつさえ、心外にも、その基底が職域論にあるかのごとく誤解する論調さえしばしば目に触れたのである。最近は微妙な変化が見られるものの、われわれが頼りとする会計学界の一部にすら予想もしない反応が生じたのである。

それはともかくとして、この問題に関して終始私の胸中を去らなかつたものに、いったい法律家は本当のところどう考えているのかの一点があった。むろん外部監査問題は少なくとも法の側からみて技術性が高いから、法律家に具体的な内容に立ちいった考えを求めるのは無理である。それ故にこそ企業会計審議会に助力を求め、関係者の研究会がもたれたともいえよう。しかし、現在の外部監査問題は、まぎれもなく商法上の監査制度

の問題である。どんな理想も、どんな妙案も、法律家の得心のゆくものでなければ、実際問題として現実に陽の目を見るのはむづかしい。われわれは49年改正当時、継続性原則を商法上の規制として定立することに、ある意味で失敗しているのである。

\*

機会あって法律家どうし話を聞いていると、当事者が知ったら仰天するような事柄が、ごく平静に日常茶飯事のごとく語られる。発想の仕方が根本的に違うのではないかと感ずることもしばしばである。

簡易監査の件についても、法律家の発言はどちらかというところ「ナイヨリマンダ」論の趣が多いようである。これに対してわが方の一部には「ナイ方ガマンダ」論が根強い。このような対極的な分れ方には、監査というものの正体を知悉しているかどうかよりも、もっと根深いものがひそんでいるように思える。

しかしこのことは、嘆いていて片づく問題ではない。また、同じ言い方の繰り返しでは、やがて誰も耳をかさなくなるであろう。その結果は火を見るよりも明らかである。すなわち、そこからは何も生れないか、あるいはわれわれの最も不本意なものが罷り通ろうとするかのどちらかである。古来、人をみて法を説けと謂う。相手の耳に入り易い言葉を発明するためには、まずもって相手のものの考え方を知らなければならない。新たな監査制度を置こうとするその基礎を、相手の言葉をもって頭に焼き付けておかないと、うまく事は運ばないように思われる。

倉沢さんの「商法の基礎」は、大小会区分立法問題に関説して、「立法は冷い理窟によっておこなわれるべきものではなくて、現状のベターな改革を志向する政策なのであるから云々」という。この辺をどう受けとめるかは、われわれにとって大きな課題であるといえよう。

## 戸谷さん ありがとうございます。

公認会計士三田会の発足以来、会の事務運営の一切をやってくれていたのは、中央会計の事務局を勤める戸谷氏であった。同氏が何でもやってくれていたので、われわれは、ただ、あれがしたいこれをやりたいと、ただ企画することだけでよかった。しかし、同氏は昨年末で退職された。ハッピー・リタイアメントで、同氏にとっては喜ばしいことである。だが、三田会メンバーにとっては大変なことになってしまった。緊急避難的意味で、西野代表世話人が、あとの事務局業務を引受けて載けたので、とにかく会の運営は停止することなく続けることが出来た。しかし、九百人を超える塾出身者の名簿管理その他諸々の仕事を西野先生一人に、お願いしたままにしておく訳にはゆかないであろうから、早急に、事務局をどのようにすべきか、根本的に考える必要がある。それほど重要で、大変な仕事を、長い期間に亘って平気で戸谷氏一人にお願いしていたということは反省しなければなるまい。とにかく、この誌面を借りて、心から「有難う」と申し上げ感謝の気持を表わしたい。

## 僕の慶早戦

昭45経済卒 高橋正彦

5時40分。どうにか間に合った。昨日から徹夜で入場待ちをしている塾生の長い列を横目に集合場所の三塁側入口前へ急ぐ。前を行く先輩のKさんを追越しながら帽子をとって「こんちわ——」と大声で叫ぶ。



応援指導部の挨拶は朝昼晩かまわず「こんちわだ。発音がちょっと難しい。「わ、の音を上げてしまうと何だか御用聞きみたいになってしまうから、少し下げる。さらに重みをつける為に少し伸ばすのだ。「こんちわ——」Kさんの声が返ってくる。入口前へ着く。そこら中で「こんちわ、の大合唱。間もなく「集合！」の音が掛かる。横二列に集合する。2年生が前、1年生は後だ。出欠がとられる。Aが未だ来ていない。後が思いやられる。

2年生のMさんが前に出て訓話を垂れる。昨日の応援は元気がなかったとか、拍手が合ってなかったとか、言われることはだいたい決まっている。Mさんが一言しゃべる度に、並んだ全員が「はい——」と応える。これが一つのリズムになっている。「はい——」の発音も「こんちわ——」と同じく「い、を少し下げて伸ばすことになっている。言われている事は訳など分らなくても、たとえ聞いていなくてもよいから「はい——」のタイミングだけは外さないようにする。

訓話の最期にMさんの大声が響く。「根性入れてゆくぞ！」「はい——」「今日も勝って優勝決めるぞ！」「はい——」。何と大胆な発言だろう、試合をするのは野球部なのに……。いや、深く考えるのはよそう、疑問を持ったらこの世界では生きてゆけない。「体操！」の声で全員上着を脱ぎ、大きな輪に広がる。「イチッ、ニッ、サン、シッ」と大声を出して準備体操だ。

Aが今、遅れて来て輪の中へ加わった。目がオドオドしている。顔を真赤にして汗でグチャグチャだ。必死で走ったんだろうなあ。「よしっ、走るぞ！」の声で二列縦隊に集合する。掛声をかけて走りだす。球場の周りを一周するのだ。入場待ちの塾生の間から拍手が起り喚声が沸く。暇を持つて余しているんだな。球場一周は約800米あるそうだ。皮靴と学生服のまま走ると、結構運動になるなあ。もうYシャツまで汗が浸み出してきた。「集合！」「遅刻した奴がいる、腕立て50回！」そら来た。1年生全員がその場で腕立て伏せを始める。共同責任というわけだ。だからチョンボした者にはよけいに応える。

体罰には、正座、全力疾走、腕立て伏せの三種類があり、その場の時間的余裕の程度により使い分けがされる。一番応えるのは正座だ。その時間は平均30分。日吉のグラウンドのコンクリート敷スタンドで、数知れず受けた正座の罰は、解放された時立ち上がる者は1人として無く、その場に寝転んで痺れが去ってゆくのをただひたすら待つしかない。

腕立てが終りそれぞれが今日の分担作業につく。僕はまず、入口裏の倉庫からプラスバンドの楽器や、応援器材の入った木箱をスタンドまで運び、そこで器材の点検と準備を行う。小旗を竹の竿に



くくりつけ、木製の鎌（早稲田の稲穂を刈取る為の応援用器具）をマジックテープで補修し、OB席と幹部（4年生のこと……まるでヤクザと同じ）席にビニール製の横長の座布団を広げ、雑巾がけをする。次にスタンドの中央最下段に据付けられたメイン台と呼ばれる応援用の三色の架台のところに行き、これに雑巾がけをする。メイン台の上に登ることができるのは幹部のみに限られており、これは掃除の時と言えども例外ではない。従って手の届かない所の雑巾がけは、金網につかまったり、誰かに片手を握ってもらいながらという相当に無理な体勢が要求される。果して僕がこの台に登る日は、本当に来るだろうか。計算上は2年半後のはずなのだが、何んだか何十年も先のように思えて気持ちが暗くなる。気を取り直して、さあ次は綱張りだ。

スタンドには、応援合戦で人文字を作り出す為の下絵となる荒縄が、縦、横、斜め、と張りめぐらしてある。それは昨日の朝、われわれが今朝よりもっと早起きして張ったものだが、昨日一日の応援で千切れたりよじれたりしてしまっている。

下図を持った2年生の指示に従って、結び直したり新しい縄と取替えたり補修して歩く。スタンドの最上段でこの作業をしていると、すぐ後で鳶の人達がデコ（デコレーションの略語。今年の絵柄は、ミッキーマウスがトラクターに乗って稲穂の刈取りをしているところ。）の補修のため、丸太で組んだ足場を、口に針金をくわえて登り降りしている。

誰も信じてくれないけれどあのデコは、われわれ1年生と2年生が三田へ日参して作り上げた物だ。材木で枠組みを作り、そこへベニヤ板を張りつけ、下絵を書き、ラッカーで色付けして最後はシンナー中毒になりながら1ヶ月半はかかった。大きさ約30畳で、これを12個に分解して運び込み、昨日の朝、鳶の人達に組付けてもらったのだ。「何さぼってるんだぁ！」先輩の声が飛んでくる。

僕のことだろうか。「はいー」手早く作業を済ます。

7時30分、3年生以下の集合がスタンドの中段で行われる。今度は三列に並んで慶早戦責任者Iさんの訓話を聞く。

彼は次期団長候補であり、眼光は鋭く気合の入っているのが分る。「上着脱げー！」服装検査だ。髪の毛の長さ、靴の汚れ、Yシャツの袖口のボタンまで抜き打ちでチェックされる。今日は皆予想していたので無事に終わった。つづいて体操、そして練習が始まる。それぞれが決められた持場へ散る。

1年生は上段の方の担当だから、スタンドを必死で駆け上る。「集合！」すぐに声がかかる。中段まで飛び下りて整列する。散り方が遅いと奴鳴られる。「練習！」再び持場へ駆け上る。調子が悪いとこれが何度も繰り返され、それだけでヘトヘトになる。

今日は一度で済んだ。「若き血、三色旗の下に、次々と曲に合わせて大声で歌い拍手をする。合間に「勝つぞ慶応！」「かっ飛ばせ××！」3年生の声が飛び、僕達は大声でこれに合わせ拍手する。大声を出す度に確実に脳味噌が縮んでゆくの分る。「集合！」ああ、又だ。「拍手合っていない！二周してこい！」皆我先きに外へ飛び出す。今朝の一周とはわけがちがう。全力疾走で、それも二周だ。靴音が響き、皆の息が荒い。手抜きは許されない。理由はあとで分る。六番目でスタンドへ戻り並ぶ。息苦しくて立っているのが辛い。大分経って最後の一人が帰ってくる。「よおーし、ケツから5人もう一周！」非情な声が響く。足を引摺りながら5人が駆け出してゆく。と同時に残った者は持場へ散る。練習再開だ。こうして一時間半、終るともう声は枯れ、手の平は赤く腫れ上っている。

日本人は練習し過ぎてオリンピックで勝てないと、テレビで誰かが言ってたけれど、僕は身をも

って同感だ。

9時15分、「こんちわー」の合唱がひときわ高く湧き起こる。幹部の登場だ。皆一様に大様な態度、艶の良い顔色。適度な運動と過度な休養は人をしてここまで身心共に健やかならしめるものなのか。いや、もう一つ、決して例外のない我が部の年功序列制度の頂点に立つことの精神的安定が、その最大の理由であろう。

バンド部も全員揃っての集合が行われる。3年生以下が三列に並び、幹部はこれに向き合って並ぶ。団長から順に役付き幹部の訓話が続ぎ、その後内外野に別れてバンド付の総合練習が始まる。この練習は、幹部が肩慣らしに一曲ずつ行うもので、3年生の緊張は相当なものだが、われわれにとってはそれほどきついものではない。

10時開門。トップの入場者を全員拍手で迎える。後に続く塾生を一行に引卒し、決められた座席へ隈みなく埋込んでゆく。伝令が飛び、入口での入場スピードを調整しながら混乱なく、かつ有無を言わず着席させる。11時入場終了。

応援指導が始まる。人文字の練習に時間がかかる。素直な人達ばかりとは限らないから、その対応にはいつも苦勞する。自分の担当ブロックによっては人格まで容易に変えられなくてはならない。体育会の連中の前では努めてヒョウキンなピエロを演じ、幼稚舎の子供達の前では優しい先生に変わる。七つの顔を持ち、コロコロ変わるそんな自分に嫌悪を持つような柔な神経は、夏合宿所に置いてきてしまった。

午後0時15分、応援合戦始まる。「拍手合わせろ！」「メシなんか喰わせるな！」次々に伝令が来る。いよいよ盛り上げてきた。人文字は上手く出てるかな。今夜のテレビで見られるかなあ。0時45分、エール交換。「起立して下さい。皆さん大きな声出して下さいね。お願いですから拍手合わせて下さいよ。僕あとでシゴかれますから。」笑声が起こる。塾旗が上る。大きく風に揺れる。

さあ、始まるぞ。「ジュッカー」団長の声が、はるか下の方から聞こえてくる。

## 私ガンバります

昭58政治卒 塩 垣 るみ子

私は、昭和60年の二次試験に合格したばかりの新人であり、公認会計士三田会の存在もこの原稿を依頼されて初めて知りました。間違いの学部から会計の



世界に飛び込んでしまった私ですが、慶應の先輩や同輩が非常に多いので、大変心強く思っています。今年の二次試験合格者をみても塾出身者が目立って多く、東京実務補習所には経済4年在学中の才媛2人がいて、男性の熱い視線を集めています。クライアントに往査にうかがっても、実業界に強い慶應のこと、どこにも必ず大先輩がいらして、あたたかく迎えて下さり、仕事もやりやすく感じています。昔は女性であると二次試験に合格しても就職先がない、などという時代もあったようですが、私としては、塾出身であることもプラスして、今は女性としてのハンデより、大いに恩恵を受けている状態です。

ところで、会報の趣旨からすれば、公認会計士制度や経済動向について書くのが本来なのでしょうが、かけ出しの私には、十分な知識も経験もあるはずがなく（まして、かの「政治、出身です」ので）、何をテーマに書いたらよいか、大変悩んでしまいました。とはいえ、ゆっくり考えている暇もないので、私が今後仕事をしていく上で、気をつけたいと思っていることを「つれづれなるままに、書いてみようと思います。

まず仕事をしていく上で、何が一番大切かという、健康だと思うんです。健康でないと、仕事をしていく上でのバイタリティや、最後までやり通すエネルギー、精神力は出てこない。体調が悪いと気分的にも落ちこんで、何もかもうまくいかないような気がします。私は、健康を保つ上で、眠ること、食べること、遊びを大事にしています。眠ることによって疲れを全部とる。食べることでカロリーが保て、遊ぶことは気分転換だと思うのですが、その三つがキチンとできないと、ストレスがたまってしまう。そうなると、仕事をしていくだけのエネルギーはでてきません。とはいえ、現実の私は、仕事を始めて3ヶ月、慣れないこと、緊張の連続で、眠れない、食べられない、遊ぶひまはない、と最悪の状態です。

次に、絶えず何かを吸収する方向に自分を持っていかなくてはいけない。私の場合は人が好きなので、接する人から吸収しています。好奇心を捨てずに、何にでも興味を持って吸収する。仕事をする上でも「なぜ」という気持ちが起こったら、まず調べてみる。それが一つの知識となって入ってくるわけです。自分で満足してしまうと、そこからは退化する一方。どんな分野にも自分より勝れている人はたくさんいるわけですから、伸びる方向に努力していかなくてはいけないと思います。公認会計士という職業は、常に人と接することの多い仕事で、特に新人のうちには、自分より知識も経験も豊富ないろいろな分野の人に接する機会が多いので、大変めぐまれた環境にあるといえます。

ところで、女性の場合、結婚を契機と考える人が多いですね。でも、たまたま自分に好きな人ができて、結婚することになったら結婚するんであ

って、仕事に生きるのだから結婚しませんと、最初からいうのは不自然だと思うのです。逆に、自分は結婚するまでの短期間、ある程度の収入があって、その間楽しくて、何年かの間だけ仕事をするというような、いいかげんな気持ちで仕事に入るのにも賛成できません。女性であっても、仕事というのは一つの真剣勝負ですから、結果として2~3年で終わってしまっても、結婚するまでという感覚ではなく、仕事に全力投球していれば、それは決してムダにならない。そこから自分に得たものというのは絶対あるはずですから。

私自身、仕事をしている上で気をつけていることは、「一生懸命やる」、「あきらめない」ということです。手抜きをすると、その人自身がいい加減にやっているという評価ではなく、女性だから、という解釈になってしまうのです。そう取られないためにも、仕事に対して100%全力投球で取り組まなくてはなりません。また、途中であきらめずに最後までやり通せば、必ずある程度の達成は可能ではないでしょうか。

女性が何かしたり、他の女性と違う活動することで注目をあびたり、話題に上ったりすることがまだ多いけれど、そういう間は本物じゃないと思います。女性だから、と相手が思っているのではないかと意識している間は両方に構えがあります。私自身も、そういう構えが大いにあるわけで、つまらないことで疲れきったりして、大いに反省しています。構えがなくなれば、本当の意味で女性も男性と同等に、社会で活躍する時代になるのではないのでしょうか。



## 義塾の近況 — 昭和60年 —

塾長室長代理 福 留 孝 夫

### 〈福澤諭吉生誕150年〉

創立125年記念行事の締め括りとして、福澤先生生誕150年記念式典が設定されていたが、昭和60年はこの1月10日の記念式典から明けたとも云える。例年よりやや規模が大きく、およそ900人収容できる西校舎518番教室を式典会場として教職員・塾生のほか全国各地からの塾員が参列した。また、福澤研究者としても著名なハーバード大学エンチン研究所長アルバート・クレイグ教授の日本語による記念講演が行われた。この講演は「福澤諭吉の歴史意識と文明開化」(福澤記念選書35)として刊行されている。

なお、1月13日には福澤先生の出生地大阪において「福澤諭吉誕生地」碑の移築除幕式が行われた。この記念碑は、もともと昭和4年に建立されたものであるが、戦時中に鋼鉄製ということで供出させられた。戦後、昭和29年に再建されたが、これは昭和37年大阪大学附属病院の新築工事の際約50米ほど移設された。今回は生誕150年に因んで大阪慶應倶楽部が中心となり関係方面に働きかけ、本来の中津蓄蔵屋敷跡(大阪市福島区福島1-1-50:阪大病院南側)の地へ移設されたわけである。

5月18日には、もう一つの除幕式が日吉で行われた。生誕150年並びに商工学校創立80周年を記念して、商工学校及び工業学校同窓会によって建立寄贈された福澤先生胸像(実物の約1.6倍)は、オープンされたばかりの日吉図書館前に設置され、日吉キャンパスに新たな雰囲気をつくり出している。



### 〈創立125年記念建設事業の進捗〉

慶應義塾日吉図書館の竣工披露が1月30日とり行われた。場所は銀杏並木左側、旧事務棟及び木造校舎跡で、地下1階・地上5階(延面積約2,823坪)のグリーングレーの建物は、日吉にアカデミックな拠点を与えた感じでもある。設計は三田の新図書館と同じく楨総合計画事務所によるもので、館内随所に若々しいデザインが試みられている。旧研究室書庫及び藤山記念日吉図書館の蔵書を所蔵するが、最大40万冊まで収容可能である。4月の新学期から開館されたが、1日当りの入館者数は延3,000人を超える盛況ぶりである。

なお、これまでの藤山記念日吉図書館は内部改装され、藤山記念館として会議室・ホールのほか国際センター日吉支部が置かれている。

三田の大学院校舎は2月28日竣工披露されたが、旧第2研究室跡に地下2階・地上9階(延面積約2,658坪)の建物が、中庭を挟んで新図書館と好一対をなしている。地階は大学計算センターとして三田計算室が占め、1~6階は教室・演習室・院生研究室等がある。7階は司法研究室・会計研究室・新聞研究所、8階は産業研究所・地域研究センターなどがある。

昨年8月着工された四谷の医学部新棟は、地下

1階・地上11階の鉄骨が組み上り、その全容を露わしてきている。竣工は昭和61年12月末で、62年4月オープンと予定されている。その暁には、現在混雑を極めている外来診察室もすべて新棟部分へ移り、また入院ベットも200床が増床されることになる。

#### 〈石川塾長の三選ほか〉

去る5月20日の評議員会にて、石川忠雄塾長の就任が決定された。5月28日から4年間、第三期目に入る石川塾長の下、次の通り常任理事も就任された。

佐々木春雄 (財務・経理担当) <重任>  
佐野 勝男 (労務担当) < " >  
辻岡 昭 (学務・施設担当) < " >  
松本 三郎 (学務担当) < " >  
関本 昌秀 (学務担当) <新任>  
佐藤 芳雄 (企画・渉外担当) < " >

任期満了に伴う学部長改選が行われ、10月1日付で下記の通り新学部長が就任された。

文学部長 大江 晁 <新任>  
経済学部 大島 通義 <重任>  
法学部長 堀江 湛 <新任>  
商学部長 清水 龍瑩 < " >  
医学部長 植村 恭夫 <重任>  
理工学部長 大塚 保治 < " >

なお、同じく10月1日付で、通信教育部長に小谷津明 (文学部教授)、研究・教育情報センター所長に速水融 (経済学部教授)、大学計算センター所長に藤沢益夫 (商学部教授) がそれぞれ新任となった。

日本学術会議の会員制度が選挙から推せん制に変更されたが、第13期会員として塾の現職者から次の通り5名が選出された。

#### 第二部 (法学部・政治学)

田中 実 (法学部教授)  
正田 彬 (産業研究所教授)

#### 第三部 (経済学・商学・経営学)

加藤 寛 (経済学部教授)

#### 第五部 (工学)

久野 洋 (理工学部教授)

加藤 豪 (理工学部教授)

#### 〈スポーツの秋〉

既にご周知の通り、東京六大学秋季リーグ戦に我が野球部は目出度く優勝を果した。これは昭和47年秋以来26シーズンぶり、通算23度目の優勝である。また、10戦全勝の優勝は昭和3年秋以来57年ぶり2度目となった。11月3日の慶早戦終了後オープンカー8台を先頭に、約2万人の祝賀パレードは午後7時半頃、三田へ到着した。山上は午後10時の閉会まで塾生・OBの歓声に包まれた。また、野球明治神宮大会でも11月11日の決勝戦で快勝し、名実共に大学野球日本一の栄冠に輝いた。

第33回全日本学生弓道選手権大会が、8月1～3日に神戸で行われたが、体育会弓術部は見事に初優勝を遂げた。出場校は男子146校、試合はトーナメント方式で1チーム5人で1人4射、合計20射の的中数で勝敗を決める。

また、男子個人戦でも久慈直伊君 (理工2年) が優勝したが、これは弓術部創部以来3人目とのことである。

ハンドボール関東学生秋季リーグ戦でも、10月25日駒沢球技場で、体育会ハンドボール部は優勝を成し遂げた。これは昭和18年春以来42年ぶり5回目の優勝となる。

(昭和60年12月7日記)

# 公認会計士三田会の有資格者の現況 (昭和60年10月末)

昭22経済卒 西野 清

## I 公認会計士・会計士補の全国版の現況

### (1) 公認会計士有資格者数

試験別	合格者数	死去数等	現在数
① 3次試験	6,652	396	6,256
② 特別試験	1,042	381	661
③ 特例試験	1,204	275	929
合計	8,898	1,052	7,846

### (2) 会計士補有資格者数

① 2次試験合格者総数	8,631 (会計士補)
② 2次→3次合格者外	6,923
③ 2次試験合格者現在数	1,708 (会計士補)

### (3) 日本公認会計士協会登録者数

① 公認会計士有資格者総数	8,898
死去・未登録者数等	(-)1,177
公認会計士登録者現在数	7,721
② 会計士補有資格者現在数	1,708
未登録者数等	(-) 136
会計士補登録者現在数	1,572
協会入会・準会員数	1,394
③ 監査法人登録現在数	91
監査法人内の公認会計士総数	3,301

## II 慶應義塾出身者数の増加の推移

### (1) 慶應義塾出身者会員・準会員の内訳表

資格別	全国数	慶應義塾出身数	%
① 公認会計士会員数	7,721	667	8.7%
② 会計士補準会員数	1,394	238	17.1%
合計	9,115	905	10.0%



### (2) 慶應義塾出身者の増加の記録

- 昭和60年度において、公認会計士は別表の如く、新たに51名が合格、また会計士補は新たに43名が合格、それぞれ登録を行った。
- 公認会計士登録の総累計は688名に達し、会計士補の現登録数の239名を加算すると、両者の登録記録数は927名となる。  
(この内、死亡等による抹消数が累計で公認会計士21名、会計士補1名)
- 上記により現在の公認会計士は667名、会計士補238名で、合計数の905名が登録されている。
- 第二次試験合格の会計士補資格者数の53名  
(上記43名の外に在校生等10名)が協会の実務補習所へ新たに入所したことにより、別表の如く、慶應義塾出身者が、入所者数において増加数11年連続トップの座を独占し続けている。正に公認会計士増加の新記録である。
- 公認会計士667名の内、登録番号の最初の10傑を紹介すると、次の通りである。  
細川幸一郎(158), 高田 栄(236)  
本間 満(241), 中瀬 宏通(400)  
尾前 正己(418), 嶋田 吉雄(420)  
中村 忠(467), 村瀬 雄次(503)  
斉藤 栄二(551), 藤井 博(635)
- 大先輩と子ども、若き血に燃ゆる公認会計士の今後の飛躍を期待したい。

Ⅲ 慶應義塾出身公認会計士数・年次別一覧表（塾出身者現在数 905）

種別 年次	公認会計士			会計士補			合計数		
	慶應出 身者数	全国会 員総数	同全体比	慶應出 身者数	全国会 員総数	同全体比	慶應出 身者数	全国会 員総数	同全体比
52/8月	258	5,385	4.8%	240	2,210	10.8%	498	7,595	6.6%
53/12月	311	5,544	5.6%	250	2,319	10.8%	561	7,863	7.1%
54/9月	331	5,672	5.8%	285	2,234	12.7%	616	7,906	7.7%
55/6月	360	5,854	6.2%	284	2,294	12.4%	644	8,148	7.9%
56/10月	451	6,429	7.0%	262	1,905	13.8%	713	8,334	8.6%
57/10月	532	6,974	7.6%	232	1,591	14.6%	764	8,565	8.9%
58/10月	583	7,286	8.0%	222	1,527	14.5%	805	8,813	9.1%
59/10月	624	7,486	8.4%	246	1,539	15.9%	870	9,025	9.6%
60/10月	667	7,706	8.7%	238	1,394	17.1%	905	9,100	10.0%

Ⅳ 慶應義塾出身公認会計士・昭和60年度登録・新人一覧表（○印は大学院卒）

氏名	学部卒	番号	氏名	学部卒	番号	氏名	学部卒	番号
伊野部友厚	41 経	8602	武川 博一	53 経	8689	辻村 俊雄	50 工	8829
川崎 泰彦	51 商	8610	田尻 悦男	54 経	8693	栗原 洋一	54 法	8830
重久 善一	51 経	8615	原 一浩	53 〇	8633	磯部 淳夫	54 経	8838
宮崎 昭一	55 経	8624	広瀬 稔	53 経	8703	松岡 仁史	55 商	8840
相沢 泰	51 経	8629	河村 勝	45 商	8704	平野 直明	48 商	8842
石黒 信二	58 商	8634	網本 重之	56 商	8708	日向 武宏	55 法	8847
相沢 俊行	49 法	8635	北田 隆	55 経	8713	酒井 弘行	55 経	8852
市村 清	55 経	8639	田中 文康	48 商	8722	下山 秀夫	55 経	8853
柳沢 義一	54 経	8651	藤枝 宗明	50 経	8757	浅井 達也	24 経	8855
松山 得治	54 経	8652	助川 正文	56 商	8760	金子 智彦	57 経	8858
木下 隆文	50 経	8654	川合 弘泰	56 経	8763	向川 壽人	51 法	8859
奥野 雅英	53 商	8657	藤井 範彰	52 商	8765	藤戸 龍也	51 商	8875
越山 薫	56 文	8666	金田 一郎	56 商	8792	関 京子	50 経	8880
安田 弘幸	55 商	8669	新田 誠	51 法	8795	宮脇 和哉	55 経	8882
水谷 英滋	55 経	8673	小関 源一	55 経	8800	滝川 邦昭	53 工	8883
吉田宗一郎	53 商	8674	大高 俊幸	54 商	8803			
村上 真文	55 商	8676	上平 徹	55 経	8811			
都築 一隆	58 経	8678	細屋多一郎	44 経	8813	(計)		51名

V 第二次試験合格者の出身校別リスト表（慶大11年連続首位達成の新記録樹立）

会計士補・実務補習所入所数・年度別調べ（57年度迄は東京実務補習所入所数）

年次	順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	注
①	昭和48年度	慶大 42	早大 30	明大 18	中大 16	一橋 11	東大 9	日大 8	法大 5	横浜 2	立大 1	昭和60年度実績・大阪大11、同志大7、専大6、神戸大6、上智大5
②	昭和49年度	中大 65	慶大 61	早大 42	明大 25	東大 10	一橋 8	横浜 8	法大 7	立大 5	—	
③	昭和50年度	慶大 32	早大 22	中大 16	明大 16	東大 9	日大 6	法大 5	一橋 3	—	—	
④	昭和51年度	慶大 50	中大 44	早大 29	明大 28	一橋 14	日大 8	法大 6	横浜 6	立大 6	東大 5	
⑤	昭和52年度	慶大 45	中大 44	明大 30	早大 26	一橋 13	日大 7	東大 6	法大 6	立大 6	横浜 5	
⑥	昭和53年度	慶大 39	早大 37	中大 34	明大 13	一橋 6	法大 6	東大 5	横浜 5	立大 3	日大 2	
⑦	昭和54年度	慶大 36	早大 29	中大 23	明大 14	一橋 9	法大 8	東大 5	横浜 5	立大 5	日大 5	
⑧	昭和55年度	慶大 30	早大 30	中大 27	明大 17	一橋 9	横浜 8	法大 5	東大 3	立大 3	—	
⑨	昭和56年度	慶大 26	早大 24	中大 20	明大 13	一橋 10	横浜 7	東大 6	法大 6	日大 3	立大 2	
⑩	昭和57年度	慶大 26	早大 18	明大 16	横浜 14	中大 11	一橋 8	東大 5	法大 4	立大 4	日大 1	
⑪	昭和58年度	慶大 39	早大 34	中大 20	明大 19	横浜 9	法大 8	一橋 8	東大 5	立大 5	日大 2	
⑫	昭和59年度	慶大 54	早大 40	中大 27	明大 20	一橋 12	横浜 11	東大 8	法大 6	日大 6	立大 3	
⑬	昭和60年度	慶大 53	早大 36	中大 21	明大 19	一橋 13	法大 12	横浜 10	日大 9	東大 9	立大 2	
(計)		慶大 533	早大 397	中大 368	明大 248	一橋 124	横浜 90	東大 85	法大 84	日大 57	立大 45	

VI 慶應義塾出身公認会計士登録順一覧（登録総数 688・抹消21・現在数 667）

登録番号	登録	抹消	累計
一 〇 〇	一五	八	七
一 〇 〇	一〇	三	一四
一 〇 〇	一四	一	二七
一 〇 〇	一四	一	四〇
一 〇 〇	一八	二	五六
一 〇 〇	二〇	一	七五
一 〇 〇	一一	一	八六
一 〇 〇	八		九四
一 〇 〇	二九	一	一二二
一 〇 〇	三四		一五六
一 〇 〇	五三	二	二〇七
一 〇 〇	六一		二六八
一 〇 〇	七〇		三三八
一 〇 〇	六〇	一	三九七
一 〇 〇	七〇		四六七
一 〇 〇	七〇		五三七
一 〇 〇	六八		六〇五
一 〇 〇	六二		六六七
計	六八八	二一	六六七